

Maia Green,

*Priests, Witches and Power:  
Popular Christianity after  
Mission in Southern Tan-  
zania.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
2003, xiii + 180pp.

こいずみ まり  
小泉 真理

本書は、アフリカの宗教研究にみられる観念的、解釈学的アプローチに挑戦し、宗教の社会政治性を重視したアフリカ人キリスト教徒に関する民族誌である。著者は1986年にタンザニア南部に位置するウランガ県のポロゴロ社会において人類学的調査を始め、その後2001年まで同社会で継続的に研究してきた。その間、ポロゴロ社会におけるキリスト教に関する数々の論文を発表し、本書はこれまでの研究の集大成である。今やキリスト教はアフリカの宗教の一部となり、アフリカ社会への影響はだれもが認めるものである。しかしながら、アフリカの宗教への関心は土着宗教へ向けられる傾向が強く、世界宗教であるキリスト教に焦点を当てた研究、特に民族誌的研究は少ない。そのような状況のなかで、本書の試みは非常に歓迎すべきである。

本書は10章から構成され、第1章と第10章は序論と結論に相当している。本篇部分にあたる第2章から第9章はおおまかに2部に分かれる。第1部を構成する第2章から第4章では、タンザニア南部におけるキリスト教成立の歴史と、植民地時代からポスト植民地時代までの宣教活動およびミッションの政治的、経済的影響力が述べられ、第2部を構成する第5章から第9章では、現代における民衆のキリスト教の実態が記述・分析されている。特に第2部に

おいては、教会運営、キリスト教徒の宗教実践、儀礼とジェンダー、さらに反妖術運動についての考察がなされ、ポスト植民地時代のキリスト教会と信徒たちの矛盾した関係について明らかにされている。

さて、各章の概要について述べてみたい。序論にあたる第1章「グローバルに展開するキリスト教と権力構造」では、本書の理論的な枠組みが論じられている。著者は、アフリカのキリスト教に対する人類学的研究動向を振り返りながら、キリスト教が研究テーマとして周道的に扱われ、現代のキリスト教徒たちの日常の実践に関する分析が少ないことを指摘したうえで、本書の目的および試みについて述べている。それらを要約すると以下の2点になる。第1に、本書は植民地時代に始まった宣教の歴史を現代アフリカへの遺産として扱い、農村部で多くの人々に受容されているキリスト教および教会の実体を民族行政の歴史的構造のなかで論じる。特に、宣教の歴史が現在のキリスト教会と国家の関係、およびキリスト教徒としてのアイデンティティに継続的に影響を与えている状況を検討する。第2に、本書はアフリカ人のキリスト教への改宗を、世界観の転換や知性的征服という観念的なアプローチで分析するのではなく、宗教転換を促した伝道体制や人々の宗教的实践に焦点を当てた実体的なアプローチによって考察する。特に、キリスト教徒による現代の儀礼実践を報告することで、改宗の宗教的意味より、むしろ改宗の実在性や実質性を明らかにする。

第2章「植民地支配と辺境性の強化」では、植民地時代から現代までの行政の変遷のなかで南部地域が辺境地となっていたプロセスが解明されている。ドイツ、そしてイギリスによる植民地支配が終わると、タンガニーカという新しい国家がアフリカ社会主義のもとで建設された。その中心的政策として、スワヒリ語の「家族的な連帯感」を意味するウジャマー(Ujamaa)を冠したウジャマー村の建設が進められた。ここで著者は、独立後のウジャマー村政策および1970年代から90年代にかけて実施された農

業経済政策や野生動物保護政策は、40年代のイギリス植民地政策の基調を引き継ぐものであり、南部地域の人々の暮らしを悪化させたと論じている。

第3章「ウランガ地域での福音伝道」では、植民地時代に開始されたカトリック・ミッションの活動と改宗の状況が考察されている。ウランガ地域でのミッションは、ドイツのベネディクト派宣教会によって1884年に開始された。彼らは植民地行政府と密接な関係を保ちながら伝道活動を進めた。やがて第1次世界大戦が終わると、ドイツの宣教会に代わりスイスのカプチン派宣教会が活動を引き継いだ。カプチン派は前任のベネディクト派の伝道方法を継続し、教育、医療、ミッション拠点の拡大に努めた。特に、彼らは少女教育を重視してキリスト教の家族観を教え、結婚の仲介まで行っていたことが述べられている。さらに、ミッションの経済活動が分析され、宣教会が農場をつくり、人々に雇用の機会および移動や通信の手段を提供していたことが明らかにされている。これらのミッションの歴史から、著者は植民地期に宣教会が果たした地域経済への大きな貢献を指摘し、ミッションが地域の重要な社会的、経済的センターとなっていたと論じている。

第4章「残存するミッションの影響」では、教会組織の運営とアフリカ人聖職者の地位や役割を中心にポスト・植民地時代の伝道活動が検討されている。独立後、教会は宣教会の管理下を離れて半自治組織となったが、植民地期につくられたその組織構造はそのまま維持された。当時の独立独歩の国家政策は公的福祉サービスの質を低下させ、その結果、教会の社会的役割は益々高まったと述べられている。しかしその一方で、欧米の宣教会から独立したアフリカの教会は財政問題を抱え、教育および医療サービスの有料化やZakaという会費制度が開始されたことが明らかにされている。著者は、ミッション初期に確立された教育、医療、物資を提供する教会とそれらを提供される人々というパトロン-クライアント関係が現在も継続的に存在し、そうした状況下での教会による医療サービスの有料化や会費制度の導入は、これまでの両者の関係を揺るがす宗教のビジネス化として人々に理解されていると考察している。

さらに、教会のアフリカ化によって生まれた現地人神父が、かつてのミッション神父のように豊かに暮らし、特権的地位を築いていることも明らかにされている。このように本章では、カプチン派宣教会によって確立された教会と行政の関係、ならびに人々と聖職者の力関係がポスト・植民地時代においてほぼ変わらずに維持されていることが強調されている。

第5章「大衆キリスト教」は、第1部の歴史的考察から第2部の民族誌的考察へ議論を移行する重要な章である。ここでは、キリスト教の観念や儀礼、教会、聖職者に対するボロゴロ人の認識が考察され、教会が主張する「正統性」から離れ土着文化と並存する大衆キリスト教の姿が明らかにされている。まず、信徒の宗教実践を分析しながら、ボロゴロ人のキリスト教理解における土着の宗教観の影響が論じられている。例えば、ボロゴロの宗教観では、神との交わりは神のパワーを具現化している物質を身体に取り込むことで可能になるとされているため、人々は聖体拝受式のパンをキリストの身体の象徴としてではなく、神の力を有する物質と認識して身体に取り入れている、と考察されている。それらの考察から、著者はボロゴロ人キリスト教徒が土着文化のロジックに基づきキリスト教およびその儀礼を実質的有効性にて理解していると結論づけ、西洋の神学に基づく儀礼の象徴論的解釈はボロゴロの文脈では適当でない、という最終章の議論に繋がる重要な視点を提示している。

第6章「親族関係とその創造」では、父系出自システムと父権が文化的に創造されていくプロセスが解明されている。ボロゴロの父系出自システムは、婚資の分配や葬儀での役割分担によって確認、確立され、父権は婚資の支払いに加え、誕生した子供にShiralaという薬を与えることで確立されると述べられている。著者は、父権を重視して父系出自システムを維持するボロゴロ社会を注意深く検証し、実際には母方のオジと甥・姪が密接な関係を持ち、また女性が夫と兄に対して同じように忠誠を保っている状況を明らかにしている。さらに、夫以外に父や兄に父権を委ねる女性たちが増加していることを指摘し、社会システムが女性によって柔軟に運用されて

いると論じている。

第7章「生む力」と第8章「女性の仕事」では、前章でポロゴロの親族関係の要として語られた女性に焦点が当てられている。キリスト教徒によって今日実践されている少女の通過儀礼ウニャゴ(Unyago)と葬儀がそれぞれの章で詳細に記述、考察されている。著者は、コスモロジカルな力が人間の生と死を生じさせているというポロゴロの世界観に注目し、儀礼はそれらの力をコントロールするための文化的装置であると論じている。具体的には第7章では、ウニャゴにおける儀礼的行為が少女の生殖の力を最大限に引き出すための象徴的行為として、また第8章では、葬儀における女性の儀礼的行為が死の力の危険性を制御するためのものとして分析されている。そして、生命のプロセスに関わるこれらの儀礼を通じて、ポロゴロ社会の女たちは女性性を体験的に習得していくと論じられている。この2章において著者は、ポロゴロ女性は生と死に関わる儀礼を通じて自らの社会的役割を理解し、精神の発達、つまり生への慈しみと死に対する悲しみの感情を発達させると考察している。さらに、そのように文化的に高められた女性の愛と悲しみの感情が、イエスを生みそして失ったマリアへの共感を呼び、女性キリスト教徒のマリア信仰に結びついていると論じている。これは、キリスト教への信仰心が文化によりジェンダー化されるという興味深い指摘である。

第9章「反妖術運動の実体」では、20世紀を通じてウランガ地域で定期的に発生している反妖術運動の発生要因が検討されている。ポロゴロ社会での妖術の鎮圧方法は、専門家による頭髪刈りと薬の使用である。頭髪刈りは先の2つの儀礼にもみられる「浄化」を意味する行為であり、妖術の力をコントロールして薬の効力を高めると説明されている。反妖術運動は、そのような妖術鎮圧の慣行が地域を越えて広がり、多くの人々を特定の専門家のもとに走らせる社会現象であると述べられている。反妖術運動の発生については、植民地化や近代化という大きな社会変化に反応して妖術が増加し、その結果反妖術運動が高まったという定説がある。著者は、この説が依拠する(または論じる)妖術の増加は歴史的

事実として証明できないと述べ、この定説の根底に「伝統」と「近代」というカテゴリー間の単純な対立と排除の図式があると批判している。そしてウランガにおける近年の反妖術運動を考察し、近代化を望む人々の政府や教会に対する不満と失望が地方役人や教会関係者への妖術疑惑に結びついていることを指摘している。さらに、本章では人々の要請により行政が特定の妖術鎮圧専門家の活動を許可することで運動が発生している状況が詳細に分析され、運動発生のメカニズムが解明されている。こうしたウランガの事例から、著者は反妖術運動において「伝統」と「近代」を象徴する物質および儀礼的行為がしばしば混在していることを指摘したうえで、運動の本質はローカルな政治のプロセスを具体的に分析することで理解されると論じている。

第10章「実質の問題」は、本書の結論に相当する。ここでは、第2部で明らかにされた現代の大衆キリスト教の実態に歴史的考察が試みられ、第1章で述べられた本書のテーマに沿った集約的な議論が行われている。まず、著者は近年の反妖術運動にみられる教会と信徒の矛盾した関係、つまり教会が運動を否定する一方で、信徒は聖職者に妖術疑惑を抱き運動を支持している状況を取り上げ、それがミッションと行政と地域住民の歴史的関係に起因していると考察している。さらに、そのような両者の矛盾した関係は、タンザニア南部の人々が物質的関心からキリスト教を選択してきた結果、大衆のキリスト教が教会の正統派的慣行とは異なる解釈のもとに実践されていることを示すと論じている。最後に本書の結論として、著者はアフリカにおけるキリスト教会は宗教的、博愛主義的機関としてだけでなく、社会的、政治的行為者として考察されるべきであり、またキリスト教が人々にもたらした実質的影響が論じられるべきであると主張している。

本書は、タンザニア南部のキリスト教徒に焦点を当てた貴重な研究である。民族誌の現在を歴史のプロセスのなかで分析する本書の試みは、人類学研究

のひとつの挑戦として大いに評価できる。歴史を現代アフリカへの遺産として扱う著者の視点は、植民地時代のミッション活動の詳細を明らかにし、キリスト教ミッションと人々の関わりを植民地政策や近代化政策のなかで注意深く検証している。特に、植民地期に確立したミッション活動とその社会的役割がポスト・植民地期に継続されている状況を、植民地政策と独立後の国家政策の継続性と合わせて論じている点は、著者の注意深い洞察力を示している。さらに、そこでなされている国家権力の脆弱化がミッション活動を強化したという指摘 (pp.34-35) は、ミッション研究だけでなく、アフリカの歴史研究においても重要な意味を持つ。第2部においては、多数の先行研究を参照および分析しながら、親族関係、ジェンダー、そして宗教や儀礼の象徴性という研究テーマに新たな視座を提示し、本書は民族誌としても優れている。

しかし、このように本書の意義を認め、評価する一方で、問題点も指摘しなければならない。まず、本書の理論的試みについて述べる。著者は第1章でアフリカのキリスト教研究にみられる主知主義や解釈主義を批判し、ミッション活動の実態と人々の経験に焦点を当てた実体主義的アプローチを主張している。これまでにキリスト教研究、特に改宗研究については、多くの研究者が理論的議論を行っている。しかしながら、本書はそれらの議論を十分に検討したうえで、自らのアプローチを提示していない。そのため、アフリカのキリスト教研究における本書の相対的な位置づけが明確にされておらず、著者の理論的主張に十分な説得力がみられない。著者は、第1部で教育や医療などを中心に教会の物質的影響力とそれらに関心を寄せたポロゴロ人の姿を強調し、第2部では、生命の力や妖術の力など、不可視的であるが実体のある力がポロゴロ社会の基礎にあり、人々は儀礼のなかで食物や薬や着衣などに具現化されるその力を体験することで、自らのアイデンティティを認識していると論じている。つまり、著者は

ポロゴロ人の改宗は教義に関わる知的要因ではなく物質的要因、そしてアイデンティティの問題として論じている。キリスト教を実質の問題として語る本書は、確かに不可視的な価値観、世界観、道徳観を論じる主知主義的アプローチに比べると、ある意味では実証的であるといえよう。しかし、人々のキリスト教への改宗が新たな知的発見を伴うものであることもまた確かなことである。本書のおよそ半分を費やしている親族関係、ジェンダー、妖術に関する議論は、むしろ改宗の知的要因への評者の関心を呼び起こし、キリスト教の文化と土着文化の世界観の間で人々がどのように折り合いをつけているのかという疑問を生んだ。さらに、第2部の議論は現代のポロゴロ文化に対するキリスト教文化の影響を検証する余地を残している。最終章で著者も認めているように (p.144)、キリスト教は知的システムであると同時に物質的実体を伴い、そこにはそれを実践する人々が存在する。しかし、本書は主知主義的アプローチを批判的に論じるあまりに、アフリカにおけるキリスト教の一側面を強調し、その結果、アフリカのキリスト教の実体の解明という点においては物足りなさを感じさせる。

最後に本書の構成について述べたい。評者は、序論における著者の議論を踏まえて本書を読み進めたわけであるが、第1部から第2部へのつながりが分かりづらく、本書の全体としてのまとまりを最終章でやっと理解した。特に、議論が歴史から民族誌へと大きくシフトする第2部では、各章で個々にまとまりのある議論がなされているが、本書の全体的テーマへの関連性が明確に議論されていない。さらに、本書を構成する多くの部分が既発論文を基に書かれているためか、重複した記述や議論がやや目立ち、説明が前後する場合もみられた。これらの問題は、アフリカ研究および人類学研究に貴重な視座を提示する本書にとって、その本質を不明瞭にしかねない残念な点であるといえる。

(清泉女学院大学助教授)